

Title	三田哲学と私(6)
Sub Title	On Mita Philosophy Society and Myself
Author	斎藤, 幸一郎(Saito, Koichiro)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1990
Jtitle	哲學 No.91 (1990. 12) ,p.69- 70
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	文学部創設百周年記念論文集I Essay
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000091-0069

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三 田 哲 学 と 私

名誉教授 齋 藤 幸 一 郎

記憶では、宇野善康君、海津忠雄君といっしょに「哲学」の編集幹事であったのは 1960 年前後であった。海津君の提案によって表紙の色がそれまでの馬糞紙色からオレンジ色に変わったのが 1960 年 11 月刊行の第 38 集からであったという事実が、その私の記憶にとって動かぬ裏付けになっている。ちなみに、表紙の哲学という題字と裏表紙の PHILOSOPHY の題字も新しい表紙の色にマッチするように海津君の手でデザインしてくれたものであったが、それらは表紙の色がその後灰色に変わった現在でもそのまま使われている。

ところで、編集の仕事をしていると、一番気になることのひとつは、予定の期日に間に合うようにその号が刊行できるかどうかということである。そしてそれを可能にするのに最も障害になるのは、寄稿予定の原稿が原稿締切期限までに集まっていないことである。多くの執筆者の中には、締切日が来てからようやく筆をとりはじめるような人もおり、そういう人の原稿は当然、10 日なり半月なりおくれて印刷所まわしとなる。ところがそういう人がかえって、校正の段階になってから原文を大幅に変えたり、新しい文章をどんどん挿入したりするので、校了になるまでの校正回数や日数は更に延びてゆく一方となり、予定通りに刊行できるかどうかがいよいよ危殆に瀕してゆくということになる。諸悪の根源は、彼が締切日を守らなかったこと、否、われわれが彼に守らせなかったことにあるというわけである。

そこで、当時、編集幹事長であった私は、ある日作成した原稿募集の案内状で、原稿締切日のところにカッコつきで「当日消印有効」の文字を入

れてしまったことがあった。私自身としては、締切日を守ってほしいという切なる願いの単純な表現にほかならず、それ以上の悪意(?)があつてのことではなかつたのであるが、その後、日頃尊敬していた先輩の先生から、「当日消印有効」という言い方は、懸賞論文募集などの場合ならまだしも「哲学」の論文募集には不適當だというご注意があり、あらためてなるほどと感じた次第であつた。考えてみれば、否、考えてみるまでもなく、募集といつても「哲学」の応募者は、いわゆる不特定多数者ではなく、ある範囲の限られた方々である。「当日消印有効」という案内状はあまりにも無配慮な十把ひとからげ式であつたと反省した次第である。

そして、われわれは教育の場でも、ともすると、われわれの学生達に対し、そうした十把ひとからげ式の対応の仕方をしてしまつてゐることがあるということにも思い至るのである。これも反省すべきことである。よくいわれているように教育の神髄は「個に発して個に帰する」ところにあるのだから。

以上